

巻 頭 言

稲化会理事 石原浩二

化学科前主任松本和子先生の後を受けて、本年9月より学科主任に就任致しました。1988年に専任講師として着任して以来、今年で11年目になります。ようやく理工学部のいろいろな仕組みがわかってきたような気がします。最初に送り出した卒研究生が30歳になっていることを考えると、短いようで長い月日が経過したことを実感致します。

この約十年間で一番変わったことは、学生の気質であると思います。特に近年、理工学部に目的意識を持たずに入学してくる学生と、できるだけ楽をして単位を取ろうという修学意欲のない学生が増えた気がします。化学科においても、1997年度から学科の定員が30名から50名に増えてからその傾向は顕著になったような気がします。着任以来ずっと、化学科の一年生の通年の必修である「無機化学A」を担当していますが、定員が50名になっても出席する学生の数は以前とほとんど変わらないといった状況です。授業態度も、これは化学科の学生に限ったことではありませんが、従来は言わずもがなであったことでも、今の学生には明言しないと分かって貰えません。例えば、予め注意しなければ、授業中に携帯電話で話したり、勝手に出入りしたり、場合によっては飲食したりする学生もいます。また、化学科の学生でありながら、化学科の学生実験をさぼる学生も見受けられます。このようなことは着任以来一度もなかつたことです。ごく最近までは、一年生の授業と二年生の学生実験で学生全員の顔と名前を覚えましたが、学生の意欲の低下と共に覚える意味を感じなくなりました。

理工学部に入學したもの、理工系の授業に

は馴染めない学生、あるいは文系の授業に興味をもつようになった学生に対して、本年度から、複合領域（昔の一般教養）で卒業研究を行うことが可能になりました。すなわち、化学科（複合領域）卒、物理学科（複合領域）卒、などが可能になりました。このような制度を化学科の学生に対しても積極的に勧めるべきなのかも知れません。

卒研究生や大学院の学生もだいぶ変わってきたように思います。大学院の充実が叫ばれ、大学院への入学が奨励されてきていますが、大学院充実と逆行して、大学院の学生のレベルは年々低下する傾向にあるように思います。着任当時の卒研究生は、こちらから何も言わなくても自主的にやるべきことはやってくれました。それは、やらなければ自分だけ取り残されるという一種の不安感からであったかもしれませんが、今の学生はそのような不安を全く感じないのではないかと思います。友達が大学院に進学するから自分も行くというような、もっと研究をしたいから大学院に進むのではない学生が増えてきたためかも知れません。また、就職が決まっているから何もしなくても何とかしてくれるだろうという安易な考えの学生もいると思われまふ。昨年、早稲田大学に寄せられた父母の声の中に「今の修士修了は昔の大学卒程度で、大学4年間で学ぶべきことを単に6年間に引き延ばしたにすぎないのではないかと指摘する意見がありました。確かに今の大学院生の中には、大学院生としての意識や研究に対する意欲に欠ける人もおり、当たらずとも遠からずかも知れません。ただコンパで騒ぐことだけは昔と変わらないようです。

「日本もようやく『出でぐい夫学』を目指す改革が行われつつあるようですが、本学科も学生の意識改革を促すべく、「出にくい学科」を目指して少しずつ変えて行くべき時期が来ているような気がします。

このような状況にある学生に対し、最もよい刺激となるのは、各方面で意欲的に活躍されている化学科の卒業生の方々の貴重なご意見ではないかと思えます。卒業生の皆様が本学科を訪れ、化学科の活性化のためによい刺激を与えて下さることを願って止みません。

化学科に赴任して

古川 行夫

東京大学理学部化学科から平成9年9月16日付けで着任しました。構造化学部門です。新潟県長岡市の出身で、高等学校を卒業するまで長岡で育った、根っからの新潟県人です。血液型はA型で、乙女座生まれです。新潟県の名物というと、酒、こしひかり、美人でしょうか。みんな好きです。趣味はこれとってないのですが、スポーツは、水泳、スキー、野球など、あまり上手ではないのですが、なんでもやります。早稲田大学では、研究室のスタッフは一人だけで、教授兼助手兼秘書であり、実験の指導や事務処理など何でもやらないといけない状況なので、体を鍛え直そうかと思っています。また、最近ほとんどやっていませんが、囲碁が好きです。読書も好きで、ここ数年は、毎夏「ローマ人の物語」(塩野七生著、新潮社)が出版されるのを楽しみにしています。パソコンはマック派です。

専門は、「分光化学」です。紫外から赤外領域の吸収分光、ラマン分光など光を用いた測定手段により、共役系化合物の構造と動的挙動を分子レベルで研究してきました。また、測定手法の開発も行ってきました。光というと化学より物理という感覚になるかもしれませんが、分子レベルで化学を語ろうとすると、どうしても、

光あるいは電磁波が必要になります。ポリアセチレン、ポリチオフェンなどの共役系高分子やポリエチレンなどの共役系低分子は、電場、光、磁場などの外部刺激に応答しやすい π 電子を持っているので、面白い物性を示し、機能性材料として有望です。だいいち、共役系化合物は色がついていて、きれいです。夢物語ですが、導線を配線するように、高分子1本を配線し、電流を流したり、エネルギーを伝達できたら面白いと思います。また、機能を果たす現場を直接みてみたいという欲求もあります。そこで、振動スペクトルや電子スペクトルを測定して、分子レベルで、物質の形や化学結合の状態を明らかにするとともに、時間分解測定法や位相・変調測定法などを使って、電荷やエネルギーの流れを観測しています。これまでは、いわゆるバルク試料を置いてはしてきましたが、早稲田大学では、デバイス(発光ダイオードやフォトダイオード、トランジスターなど)の研究もしたいと考えています。ちなみに、みなさんが使っている携帯電話の表示が有機発光ダイオード(有機ELとも呼ばれている)になる日が来るかもしれません。デバイスでは、有機薄膜、有機薄膜と金属との界面などバルクとは異なる環境が重要です。このような研究では、高真空中でしか使用できない測定法は役に立ちませんが、分光法は大気中でも高真空中でも使用できる、有用な手段です。ナノメータースケールの非常に小さいデバイス(究極は、分子1個、高分子鎖1本)の研究も行ってゆきたいと思っています。化学物質は有機物だけではなく、無機物もあるわけですから、無機物も対象にしてゆきたいと思っています。また、これまで観測できなかったものを観測するために、新しい測定法の開発も行ってゆきたいと思っています。そこから、新しい化学が発展する可能性があるわけです。目標は大きい方がよいので、化学者としての最終目標は、「自分の名前をついた法則を世の中に残すこと」にしています。

研究者の世界に足をつっこむことになったきっかけは、まだ学部生だった頃に、ドーピングしたポリアセチレンが金属的な電気伝導度を示すことが報告され、ポリアセチレンに興味

をもったことです。それ以来、共役系のもつ面白さに魅せられて、今日まで、共役系を研究対象としてきました。ポリアセチレンの研究が爆発的に発展してゆく様子をみて、実感したことは、当たり前ですが、科学は、難しい教科書や論文を勉強して完全に理解すればよいというものではなく、研究者が作ってゆくものであるということです。創造なんです。自由なものなんです。そこで、どのような実験結果、考え方、概念を提出するかが、研究者の個性です。きまりきった方法や考え方が通用しない新しい世界において研究を発展させてゆくためには、物事を覚えているだけではだめで、基礎をきちんと理解していることが必要です。研究者の個性という視点で、学術雑誌に載っている論文を読むと、素晴らしい論文とくだらない論文がみえてきて、論文を通して化学者の姿が想像できるようになり、化学が面白くなってきました。科学では、自由で生意気なことが必要なのです。外から見た早稲田大学のイメージを一言でいうと自由奔放でした。科学が発展する必要条件を満たしています。早稲田大学で教育と研究に携わる機会をいただいたことに感謝しています。

研究室が一人前になるまで、少し時間がかかると思いますが、4年生3名（石間満君、岡村大二君、望月友晴君）と一緒に、研究室を立ち上げています。一人でも多くの学生に、化学の面白さを味わってもらえるような研究室にしたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

訃報

井口先生の思い出

多田 愈

敬愛する井口先生が1998年2月に逝ってしまつた。70歳で早稲田の定年を迎え、幾歳月も経ずのことであつた。退職後も時折大学に顔を見せて勉強を続けられ、教員ロビーと一緒に食事をしながらのお話では、お孫さんを保育園に

迎えに行くことなど楽しそうに話された。お元気なんだと思つていた矢先に訃報を耳にした時は正直言って大変驚いた次第であります。

今はもう大分時間が過ぎたことでもあり、本稿では追悼文というよりも、ありし日の井口先生の思い出を記してみたいと思います。

私が先生に初めてお会いしたのは1967年の3月下旬のことであつた。高橋先生、井口先生そして私の3人はこの年の4月に同時に早稲田に赴任しました。私と井口先生は在米生活を切り上げて3月に帰国し、関根先生、高宮先生に呼ばれての初顔合わせでお会いしました。確かベレー帽を被り、フランス留学を経てアメリカのNotre Dame 大学から来た粹な人というのが私の第一印象であります。

先生は宮崎のお生まれで、旧制高等学校までは九州に、そして戦争中に発足した東大第二工学部に進んで、その時は造船科を出ておられます。しかし時代が落ち着くと純粋学問への想い断ち難く、物理学科に再入学されて量子力学を修めた人物であります。

先生は化学の問題に量子力学を応用した量子化学への路を歩んできましたが、化学出身の人がなかなか手を出しにくい固体物性への量子論の導入で大きな足跡を残しております。私は専門が違うので先生の理論はほとんど理解できませんが、面白いのはあの真面目な先生が取りつかれていた理論がモンテカルロ法という何でも賭場のチップ配りの論理を利用したものであつたことです。

これは多くの方が知っていると思いますが、先生はなかなかの硬骨漢で、我々がこのことは誰かに言って欲しいけれども、自分では言い出せないといった時には、決まって井口先生の出番でした。九州男児の面目躍如と言つたところです。お陰で化学科も随分救われたことがありました。

晩年は歩みもややゆっくりとなり、少し前屈みであつたので若い方には想像しにくいと思いますが、井口先生が皮ジャンパー皮ズボン、白いマフラーをなびかせてさっそうとオートバイを駆けて来たりした姿が思い浮かんできます。今ではアニメーションで見る光景でしょうか。

量ではなく質で味あうお酒や料理にも一家書ある人で、その道の達人である故関根先生とは肝胆相照らす仲でありました。しかし、ご兩人なかなかの御仁でありまして、広い話題を遍歴する間には決まって主張が違ふことになり、口角沫を飛ばしての議論は周りをおろおろさせたものでした。しかしさすがは大仁、席が変われば何のわだかまりもなく仲良くしておられました。あちらの世界でもまた鍋などつつきながら周りをおろおろさせていることでしょう。

ご冥福を祈るのみです。

45年間の親しい先輩

——電電公社電気通信研究所で——

化学科非常勤講師(放射化学) 野崎 正

「やおおはよう、いい天気だが少し寒くなったね。」井口さんが本を片手に、威勢の良い足取りだが一寸背を丸めがちにして入ってきた。昭和30年代前半の月曜日9時頃、電電公社通研(現在のNTT武蔵野研究所)内の一室のことで、毎週この時間に輪講をやっていた。私は昭和28年にこの研究所に就職し、基礎部理学科に配属されたが、そこは数学、物理、化学の総勢約70人のメンバーがおり、井口さんもその一員として手廻しタイガー計算機を使って、エネルギー準位などの理論研究をしておられた。そのキャンパスは、大戦中は中島飛行機の工場として空爆の第一目標となり、多くの従業員や勤労働員の学徒が殉職され、1トン爆弾の弾痕はそのままに放置されていた。本学の東伏見運動場も徒歩範囲で、付近には畑の中に武蔵野の雑木林が点在し、昼休みや上曜の午後(当時午前は勤務)に、散歩しながら色々と話合ったものだ。当時、電子工学・電気通信はアメリカが絶対的先進国で、占領軍の示唆もあり、日本電電公社でもベル研究所をまねて基礎部、機材部、試作部まで有し平均年齢20代の職員千数百人からなる研究所をつくった。だが、初月給で背広一着買えぬ貧しい社会で、電話不足の解消に追われている電電公社では、実用化研究が優位視された。また、当時は基礎から始まる総合研究

を主権・統御できる日本人は居なかった。そこで、基礎部門では各人に詳細なテーマは指示されず、課長は味方であったが、自らテーマを考えて電気出身で実用化一辺倒の有力者を納得させる必要があった。裏を返せば、それさえ出来れば好きなことをやれたのだ。私は、当時の社会風潮によって新設されたアイソトープ研究室に配属され、半導体ケイ素中の不純物に関する放射化学的研究を選んだ。井口さんは理論計算という専門分野のため、この説得にはかなり苦勞されていた。輪講参加者は5人程度で、核物理、放射線計測、電気化学、統計力学といった基礎を勉強した。数式の変換などが出てくると、井口さんにはとてもついていけなくなった。輪講の後いつでも、外国の真似だけを重要視する幹部のふがいなさや、安月給などの不満を述べ合い、将来どうすべきかについて語り合った。皆若く各方面で飢えており、井口さんの主張は熱気にあふれていた。当時は皆、誇りを持って各自の専門分野を大切に、上司にとっては扱いにくい連中だったろうが、勉強はよくやっていた。麻雀もよくやった。井口さんはフランスへ留学されたが、その前に言葉の練習も兼ねて、二人でしどろもどろのフランス語で偉い人たちの悪口などを言って笑ったものだ。また、パラターフェニル誘導体の紫外吸収の研究と一緒にやった。

やがて所得倍増計画が始動し、新制大学ラッシュ、中央研究所ラッシュによる研究者不足の時代が来た。私は昭和38年に理化学研究所に転出し、間もなく井口さんも玉川大学に移られ、さらに早稲田大学へと変わられた。それから25年程の歳月が流れ、私は北里大学にいたが、ある日電話を受けた。「井口ですが、おお、しばらく。元気かね。ちょっと、できるならお願いしたいんだが、放射化学の講義をしてくれないか。」私は講義に行くたびに井口先生の部屋を訪れ、通研時代のことや世の変化や、早稲田大学の現状などについて話に花を咲かせた。先生の定年後校内で二度お会いし短い会話を交わしたが、次に接したのは訃報であった。私もあと一年余りで早稲田大学ともお別れだ。最近は、先輩や友人のご他界は、楽しかった会が終りに

近付いた頃、「では一足お先に失礼する」と言って立ち去られるのと同じように感じられる。井口先生には、最後まで老いは感じられなかったが、人の悪口はぐっと減り、円満・円熟味を感じさせられた。今度お会いするとき、眼鏡ごしにじろっとこちらを見ておっしゃる台詞は「おお来たか、案外早かったね」か、それとも、「随分ねばったな、あっちは最近どんな具合かね」だろうか。

前略、井口先生

平成7年卒修士 齋藤 龍郎

前略、井口先生。

あれから、もう一年経つんですね。あのときはどうしても実感が湧かず、信じられませんでした。年賀状にだって、当時事故を起こして叩かれていた僕の就職先を心配して、「マスコミの言うことなど気にするな！」って、励ましてくださいましたっけ。お元気なんだなあ、あいかわらずだなんて、安心していたんです。

研究室時代を思い返せば、僕は先生に怒られてばかりでした。図書館に行ってきますとかいって、悪友どもとゲーセンで遊んでたり。ゼミで論文を読ませれば要領を得なくてチンプンカンプンだったり。資料を作れば字が小さくて分かりにくくてどうしようもなかったり。卒論の結果がどたんばで間違ってたと言ってはあわて、修論の結果がでてくれないと言ってはジタバタし、先生には迷惑ばかりかけていましたっけ。先生と一緒に行った、夏の追分ゼミ合宿、楽しかったですね。先生の運転する車は結構スピード速くて、隣の車をバンバン抜いていたのを覚えています。毎晩の先生や先輩たちとの飲み会も面白かったなあ。あのときでしたね。先生の留学時代や、もっと昔の冒険記を教えてくださいましたのは。あれはもう、5年も6年も前になるんですね。

午後3時の日がさしこむ窓のそばの、お決まりの場所でお茶をすすりながら、バカばなしに興じたり、先生や先輩たちと議論を戦わせたり。

それも研究に限らず、政治とか、経済とか、最近の風潮や教育や、もっとおかしな話しも。懐かしいですね、先生。

研究室を閉めたとき、それまでは背表紙を見ただけで頭痛と眠気が襲ってきた本を、処分や山分けにしなければならなくなって、それまでだって自分なりに勉強はしてきたつもりだったのに、もっと研究らしい研究をすれば良かった、と恥ずかしい後悔をしまい、急にこの、捨てねばならない小難しい本たちがいとおしく思えてきてしまいましたっけ。みんなで取り合ったパソコンも、引き取り手に渡したり捨てたりして、研究室が空っぽになってしまったときに、学生時代は終わってしまったんだな、と今思えば喪失感とともに、やっとな実感しました。

そんな不肖の弟子が実社会に出て行くとき、先生から一筆いただいたときの文面には、過大な誉め言葉が、それも何だか暖かい、その通りに活躍しなければ、と奮起したくなるような文章が書かれていて、就職戦線に苦戦していた僕にはただただありがたく、胸がいっぱいになったものでした。

そして一年前。あのときは、それまで全然会えなかった、散り散りバラバラの同期や先輩たちと、悲しい再会をしました。先生とも、先輩たちとも、こんなことになる前にもっと何度もお会いしておきたかったのですが。今はいたしかたの無いことですね。

先生、僕はまだ何とか、研究で食っていく仕事を続けています。腕も少しは磨きました。おっちょこちょいのトラブルメーカーぶりは相変わらずですが、先生から教を受けて、研究室で学んだことは、直接、間接問わず、本当に役に立っていますし、もっと活かすつもりでおります。今からでもさらに頑張って、一人前の研究者目指して修練を積みたいと思います。どうか、バカ弟子の悪あがきを、そこから見守ってやってください。

それでは、また。

草々

平成10年11月20日

齋藤 龍郎

留 学 便 り

スクリプス研究所 名本 謙治

スクリプス研究所 (The Scripps Research Institute, TSRI) での大学院生活を始めてから1年余りが経ち、アメリカでの生活も漸く落ち着き始めてきたことから、「海外便り」への投稿依頼のお話を頂いたのを機に TSRI での大学院生活や研究活動の一端を紹介させて頂く事にした。

TSRI は米国カリフォルニア州南端の都市 San Diego の郊外 La Jolla の小高い丘の上に位置し、隣接するゴルフ場の緑を挟んで広々とした太平洋と向合う大変恵まれた立地条件にある。その歴史は、1924年に当地の慈善家 Ellen Scripps が Scripps Metabolic Clinic を創設したところまで溯ることができ、元々は病院付属の研究部門として医学分野で業績を伸ばしていたが、1980年代半ばに立遅れていた分子生物学と化学の部門が創設されると、これが起爆剤となって研究所全体の研究業績が急伸することとなった。特にその発展の中核を担ってきた化学部門は、一昨年に新研究棟への移転を果たすとともに、優秀な人材の獲得にも力を注ぎ、化学系の研究機関として世界的に高い評価を得ている。

TSRI の大学院プログラムは、1989年に設置され、現在 Chemistry プログラムと Macromolecule and Cellular Structure and Chemistry (MCSC) プログラムの2課程に、総勢133名の大学院生が在籍している。学部課程を持つ一般の大学に設置された大学院と異なり、少数の院生が多数のポストクや上級研究員の間に交じって研究に従事する環境となっており、知識と技術を兼ね備えた実践的研究者の養成を強く意識したプログラム内容であると言える。両プログラムとも約5年間で ph.D を取得できるように設定されているが、教員数名から成る博士論文審査委員会の承認の可否によって、この期間の長短にはかなり幅がある。また、例年

9月に10名程の学生がそれぞれのプログラムに入学してくるが、学部卒業直後の学生のみならず、企業勤務経験者や修士号既得者等にも国籍を問わず門戸を開放している。日本人院生も現在 Chemistry プログラムに私を含めて4人、MCSC プログラムに2人が在籍している。

私が現在博士論文研究に従事している K.C.Nicolaou 教授の研究室は、常時30名前後のポストクと10数名の院生とを擁する所内でも有数のマンモスグループである。また、グループのメンバーの国籍は、国際的な人事交流の盛んな TSRI においても群を抜いて多様であり、Nicolaou 教授御自身がギリシア出身であるのを始め、北米、アジア、ヨーロッパの14の国と地域から研究者が集まってきている。日本からは、私の他に、現在4名のポストクの方が研究に参加している。

グループ内で進行中のプロジェクトは今9つあり、主に天然生理活性物質およびそれらの有用類縁体の合成が行われている。各プロジェクトの遂行および院生の教育という点で、グループ構成員の4分の3を占めるポストクの果たす役割は大きく、その様々なノウハウが研究現場での問題点解決と院生の実験技術向上とに大きく寄与している。

米国の理科系大学院生の多くは、学費が免除になる上に何らかの形で大学院から生活費相当の給料を支給されている。私は現在、ラボでの研究活動 (RA) に対する見返りとして月額1400ドル余りの給料を受け取っているが、これでアパートの家賃、食費、光熱費、車の維持費や諸雑費を賅っており、財政的に自立した生活を営んでいる。

アパートは TSRI から車で10分程の UTC エリアという非常に治安の良い地区にあり、もう一人の院生と部屋を共有している。隣接するカリフォルニア大学サンディエゴ校や近隣の研究所などに勤める研究者とその家族が多く住んでおり、また、すぐ近くにリゾート地として有名な La Jolla の中心街とビーチがあることから、南カリフォルニアの穏やかな気候と相俟って、この地区の地価と家賃が東京都区部並みに高騰しているのは皮肉な話である。それでもなお、

連日深夜に及ぶ研究生活を和ませてくれる美しい街並や景色が散在するこのエリアは、ストレスの多い大学院生活を乗り切るには好適であると言える。

強力な研究資金獲得能力を背景に目覚ましい成果を挙げ続ける TSRI での大学院 5 年間は、日本では得られないユニークな経験になると考えている。TSRI へ留学してくる日本人ポストドクの方々のお話を伺うと、こちらの大学院制度と日本でのそれとではやはり各々に長所と短所とがあるようである。それらを十分に見極めた上で、均整のとれた知識、経験と幅広い視野を如何に身につけてゆくかが、これからの大学院生活で私に課せられた課題であると思っている。

最後に、私の留学実現へ向けて暖かい励ましと御尽力を賜った中田雅久先生はじめ化学科の諸先輩、諸先生方に改めて御礼申し上げますと共に、早稲田大学化学科の益々の発展を祈りつつこの小文の結びとしたい。

(平成10年10月、スクリプス研究所にて)

博士号を取得して

高安 徹

1986年早稲田大学本庄高等学院に入学してから12年が過ぎました。この間多くの先生方や職員の方に、特に新田信教授には大変お世話になり、1998年3月に学位を取得することが出来ました。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。

「今やっている化学は教科書を書き換える化学」という先輩の言葉に魅せられてここまでできてしまった感じです。7年間アザアズレンやアズレンを合成してきましたが、製薬になりそうな化合物はなく、中には非常に不安定な化合物もありました。さらには、ネズミが死んでしまう可能性のある化合物達を扱ってきました(あのネズミは始めから元気がなかったと信じています)。とても AIDS や癌に効きそうな化合物は出来ませんでした。化学科として理論的に興味

のある化合物を扱ってきたわけですが、なにかに利用できないものでしょうか? 応用は他に任せておけば良いというわけには行かないと思います。何らかの魅力を示さなければ誰も使ってくれない化合物になってしまいます。自分自身でその魅力を示さなければならないのです。つまり、工業的にも興味(の可能性)のある化合物にして上げたいと思うのです。せっかく「理工学部」なのだから、理論と工学と一緒に考えてゆければと感じています。

また、オープンキャンパス(学科相談窓口)の際には伊藤紘一先生から「理学を名乗るからには当然新しい考え方がなければならないし、自分自身で証明してゆく必要がある。さらには、本当に正しいのか試みたくなるのではないか。そのためには寝食を忘れて実験に没頭してもいいのではないか。」と熱く語ってくれました。

最後に、先日(8月半ば)65号館の1階で、S17年応化卒の人達が、最近の様子について見学に来られていました。第一線を退かれた後も化学に興味を持ち続けていることに感心させられました。自分もそうありたいと思います。

大坂 直樹

初めに、化学科の先生方、職員の皆さん、また早稲田の化学科の先輩後輩の多くの人には大変お世話になりました。特に伊藤紘一先生には多くのことをご指導いただき、ありがとうございます。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。

大学2年の初めに資源工学科から転科して化学科へとやってきて8年、長いようですがこれからの人生を老衰まで生きるとしたら、決して長くはないのだらうと思います。4年生で伊藤研に配属になってから、超高真空中における金属表面に吸着した分子と長くつきあってきました。思うように進まず幾度となく挫折しそうになったのも過去の事実です。ただ自分の興味ある現象について明らかにできるということは、気持ちの良いものです。(自分がそのような気分になるような研究を成し遂げてきたかは別ですが)。これから研究を始める人、また大学を

出て新たな分野で研究を始める人、そして研究や化学から離れて違う方向に進む人、様々な人がいると思いますが自分の興味というものを大事にしてもらいたいと思います。そして自分の体は大事にしてください。自分の体が正常であってこそ自分の力で何かができると思います。自分自信も早稲田を離れて北海道に来て2ヶ月が過ぎました。こちらはそろそろ雪の降る季節です（現在11月12日、まだ雪は一回しかふってません）。きれいだったイチョウの紅葉も終わりに近づき、本格的な寒さがやってくるのだと思います。慣れない環境で体調を壊したりする時間的、身体的ロスをできるだけ、自分の行動に意味と責任をもって行こうと思います。

これからいろいろな形で化学科に関係した方々に、仕事上でも個人的な問題でもお世話になり、ご迷惑をおかけするときがあると思いますが、よろしく願いいたします。最後に急な原稿依頼だったため、いたらない文章になっておりますがご容赦ください。早稲田大学理工学部の、そして特に化学科の更なる発展を祈っております。

酒井 誠

長いもので、早稲田大学理工学部化学科には、入学してから10年間、研究室配属（高橋研）を経てから数えても実に7年も居座り続けてしまった。よくよく考えると20代のほとんど全てを過ごしたことになる。恐ろしいものだ。化学科の家風？が肌に合ったのかどうかは定かではないが、少なくとも高橋研での研究が私の化学に対する興味と一致した（させた？）ことは間違いない。すなわち「化学反応を物理化学的に考える」という興味であるが、実験方法も非常に明解でユニークな、時間分解ラマン分光および吸収分光を用いた。時間分解分光は、あっという間に終わってしまう化学反応の瞬間瞬間をスナップショット的に「連続写真」として捉えようというもので、時間分解能（カメラのシャッタースピードに相当）が桁違いに優れたナノ秒（10⁻⁹秒）レーザーやピコ秒（10⁻¹²秒）レーザーなどを使うと化学反応中の分子の立ち居・

振る舞いさえも垣間見ることができるものである。11でいうのは簡単であるが、現実はそんなに甘くはなく、ここまで優れた「写真機」になると気温が1度上がった程度のほんの些細なことで「スナップショット」1枚すら撮れなくなってしまう。「写真機」の調整だけで不眠不休で何日も費やすことも多かったが、大変な分だけ、これだ！と言う「スナップショット」や「連続写真」が撮れた時の喜びは非常に大きなものである。化学をしながらプロのカメラマンと同じ心境になれるのも妙な話であるが、いずれにせよ、それによって化学反応を1つ理解することができることになる。そんなわけで、このような超高性能の「写真機」で一生懸命遊んでいる？うちにいつの間にか私はここまで来てしまったようであるが、非常に有意義な研究生生活であったと思う。

さて、後輩達、特に研究室に配属される前の学生達に一言。

最近、研究室配属前に自分の専攻を決めてしまっ、それ意外は興味がないという学生が多くなったように感じます。異なった角度でものを計ることは非常に大切なことで、同じ研究を行うにしても、様々な視点からアプローチすることで新しい発見をすることができるものです。自分の専攻にこだわり過ぎるあまり、研究に対する可能性を自ら摘み取ってしまっ、はいいませんか？化学に対する好奇心さえあればどの分野（研究室）に進んでもその中で興味あることを必ず見つけることができる、自分の研究を化学に対する興味と一致させることは可能です。君達の力によって早稲田の化学科がさらに発展することを期待しています。

最後に私事ですが、昨年の3月に高橋博彰教授の指導のもと、博士号を取得することが出来ました。高橋先生をはじめ、化学科の諸先生方には大変お世話になりました。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。

「博士論文題目」

ピコ・ナノ秒時間分解ラマン分光および吸収分光による電子励起状態の構造とダイナミクスに関する研究

近藤 祐一

小学校の3年生か4年生の頃、「将来の夢」と題した作文が宿題に出されたとき、私は「将来は博士になる」と書いた。ずいぶんと生意気な発言だが、何のことはない、その頃よく読んでいた漫画の登場人物が同じことを言っていたのに感化されていたのだ。けれども、この時から、私の将来の夢は博士号を取るようになった。大学に行くのは博士になるため。だから院に行くのも当たり前。そう思って早稲田の門を叩いたのが11年前である。

今春、この長年の夢を漸く叶えることが出来た。博士号授与式に両親を招待することも出来、まさに感無量である。早稲田を選んで良かった。まがりなりにも最後までやり通すことが出来て良かった。本当にそう思う。ただ、残念なのは、博士課程に進学する後輩達が少ないことだ。私のような落第点だらけの者が言っても説得力が無いかも知れないが、後輩諸君、チャンスは多分一度だけ、今だけだ。それならば望みうる最高の物を手に入れてみたいとは思わないかい？

最後に、グズでのろまな亀の私に辛抱強く機会を与え続け、指導して下さった石原先生、松本先生、ならびに化学科の諸先生方に心よりお礼申し上げます。有り難うございました。

研究室便り

石原研究室

本研究室では、無機化学における溶液内反応の研究を行っている。主に、金属錯体、非金属錯体、有機金属錯体などの溶液中における組成、構造、解離平衡、置換反応、酸化還元反応などを対象としている。

研究対象は、ボロン酸、白金(IV)錯体、白金(III)二核錯体、パラジウム(II)二核錯体であり、分光光度計、NMR装置、高圧実験装置などにより、これらの錯体の溶液中反応を速

度論的および熱力学的に解析し、反応機構や中心元素の酸化状態による反応性の違いを解明している。

ボロン酸の研究では、ボロン酸のより優れた指示薬を開発するため、ボロン酸と三座配位子であるH-レゾルシノールとの反応性を調べてきた。現在、ボロン酸の反応性を調べ、ボロン酸に関する更なる知見を得るための研究を進めている。

白金(IV)錯体の研究では、一般的に解媒反応や還元反応が主流であるが、テトラメチル白金(IV)錯体は還元反応を伴わず置換反応を起こす。この特性を活かし、白金錯体の高酸化状態における配位子置換反応の反応機構の解明に力を注いでいる。

白金(III)錯体は、 α -ピリドンを架橋配位子とする二核錯体構造を研究している。白金四核錯体(白金ブルー)とオレフィンとの反応では、ケトンやエポキシドなどの低分子量有機化合物を解媒的に生成し、反応機構はWacker法に類似しているが、その反応活性種が白金(III)二核錯体である。配位子にオレフィンを用いて反応速度を測定し、二核錯体とオレフィンとの反応機構の解明を研究している。

パラジウム(II)の研究では α -ピリドンを架橋配位子とする二核錯体の異性化反応と溶存状態を扱っている。この錯体にはHH型とHT型があり、結晶中にはHH型しか存在しないのに対し、溶液中では2つの異性体が平衡状態で存在している。この異性化の反応構造の解明を目的としている。

伊藤研究室

伊藤研究室は、62号館地下2階と65号館の5階で、理工総研研究員1名、D3 2名、M2 2名、M1 1名、B4 5名、そして伊藤祐一先生の計12名で活動しています。8月までは助手のOSさんもいましたが、めでたく北海道大学に就職が決まり、スターウォーズの人形40体余りと共に去って行きました。

研究内容は多種多様で、

①超高真空

② SFG (和周波発生)

③ 赤外外部反射

④ ラマン

⑤ コロイド

⑥ 量子化学計算

と、こんなにもいろいろあります。あえて共通点を言うとしたら、⑥以外は「界面つながり」でしょうか？①はD3のAさん、M1のHGさん、B4のKN君が62号館でやっています。②は研究員OEさんとB4のP.P.君が、たればんだをパソコンの上に奉って奮闘しています。③はD3のUさんとB4のKG君が、どちらも遠路はるばる通学して頑張っています。④はカメハメハ大王M2 Tさんが液晶を、B4のI君が顕微ラマンをやっています。⑤は前述のSFGもやっているM2のSさんと、今だに1年生と間違えられる私B4のNが、狭いドラフトを奪い合いながら合成に励んでいます。⑥は再び研究員OEさんが、一人二役をやっています。

これらを統率する我が師匠伊藤先生は、国際会議ICOFTSも終わってますます元気になり、自ら指導しに来て下さいます。これからも皆仲良く研究生活に励んでいきたいと思えます。

高橋研究室

高橋研の歴史は長い。それは理工学部化学科の歴史といっても決して過言ではない。私事で恐縮であるが、僕は今年で二十二歳になる。言うのは簡単だが、二十二年はそんなに短くない。楽しいこと、辛いこと、いつまでも思い出として持っておきたいこと、あまり思い出したくないこと、いろいろある。しかし、高橋研究室の歴史はさらに長い。つまり、僕が生まれた時には、既に存在していた。という事は、僕が今まで経験した事などからは、まるで想像もできないような歴史があるはずである。そう思う今、改めて、そのような研究室に身を置ける自分をとて幸福に感じている。

前置きが長くなった。我が研究室では、「光化学反応を追う」という事をやっている。物質は光エネルギーを得ると、状態の変化を起こす。その変化の過程を、ナノ秒・ピコ秒オーダーで、

時間的に追っていくという実験をやっている。特に、「ラマン測定」には力を入れており、日夜努力を重ねている。

「ラマン」について少し説明しておく、ある物質に単一振動数のレーザー光を照射すると、入射方向とは異なった方向に若干違う振動数を持つ光が散乱される。その散乱の事を「ラマン散乱」といい、この散乱光を観測しスペクトルにしたものを「ラマンスペクトル」という。

「ラマンスペクトル」は、例えば分子内で結合が一つ違うだけで、全く異なったスペクトルを得る事になる。よって時間的なスペクトルの変化から、その物質の反応経路等を知るのに非常に有用なのである。

最後に、上で述べた「ラマン散乱」は非常に弱い散乱である為、長時間に渡って測定を行ったとしても、望んでいた結果が得られない事も多い。しかし、そこで諦める事なく好奇心を持ち続けられれば、可能性は無限に広がっていくものである。これからも、高橋研究室の一員である事に誇りを持って、研究に励みたいと思っている。

多田研究室

我が多田研究室の研究テーマはメタン発生菌によるメタン発生機構のモデル化と葉酸の新規合成法の研究を行っております。

構成員は多田研を統率する多田先生、M2が1名、M1が3名、B4が6名となっております。有機反応化学研究室ということで、実験が命。基本的な在室時間は、10時から17時となっておりますが、一人一人が別々のテーマを受け持っているため、それぞれの実験の進み具合によって流動的になっております。個々が独立して研究するというのは短所もいくつかありますが、責任をすべて自分で受け持つという点ではやりがいがあるものと思われれます。多田先生や先輩が指示するという形はとっておらず、自分の考えに基づいて行動し、実験に行き詰まったら多田先生らのアドバイスをもらいます。朝早く来て実験を始めるものや、夜遅くまで残って頑張っているものなど様々です。実質的に拘束

時間はあつてないようなものですが、さばればそのつけは自分自身にまわってきます。月に一度の実験報告会では、実験が進んでいない者に対しては多田先生のほうからの“御助言”があります。以下に簡単に研究員の紹介を行います。

まず多田研を統率する多田先生ですが、多田研きってのワイン好き。冗談もしばしば。

M2：実験器具割りまくり薄。

M1：自転車マニアの佐藤。九州まで行ってしまった。

多田研唯一の女性、ミス多田研、和山。ランプ亭男田沢。捕らないキャッチャー。

B4：久保。九州男児。らしい。ナマが好き。桜井。大食い、ものまね、本能のおもむくまま、字も汚い、ホテル好き。塩野。玉が好き。ウ○コもでかい。四十万。四年生で最も研究熱心なエロ男。島村。いっちゃってる。やばい。飲んでないのに酔うときがある。陣内。山の中からやって来た。こだわりのエロ男。

中井研究室

残念ながら、我が化学科中井研究室は試薬、試験管、フラスコ、といった実験道具は何にもありません。そもそも実験は行いません。それでもやはり化学の研究をしているのです。

かの有名なアインシュタイン博士は、思考実験を得意としていました。頭の中で自由に実験を行って、数々の偉大な自然法則を見出しました。彼にとっては、理論物理というのは、紙と鉛筆の学問でありました。

我々、理論化学を志しているも、化学の系の特性上、頭の中で実験というわけにもいきませんので、計算機に力を借りています。しかし、どのような実験を行わせるかを考え、その結果から、自然法則を見出そうとする姿勢は同じといえると思います。

たまには休みつつ、気がのったら研究もして、自由な雰囲気の中で生活するという何もないところか何かを産みだそうと努力する者にとって必要な環境であります。そういう環境の

中で研究できる我々は幸福です。

研究室のメンバーは、M2のK君、M1のB君、K君、B4のI君、K君、S君、N君の7人でございます。現在の各メンバーの様子を紹介しますと、M2のK君は高等学校で教鞭を振っています。B君は計算機部屋でネットワークの管理をしています。M1のK君は就職先を探すべくネットサーフィンしています。I君は明日のゼミに備えて徹夜体制です。S君は論文を読んでいますね。N君は中井研自慢のエスプレッソマシーンで入れたコーヒーを楽しんでいます。B4のK君は病弱な為、病院に薬を取りに行っています。みんな、ばらばらの様に見えますが、実は結束力もあるんです。お昼ご飯は毎日一緒に食べにいきます。こう見えても、遊んでばかりいるわけでもありませんよ。研究もきちんとやっています。我ら7人をまとめてくださっているのが中井先生です。先生は出張や論文執筆などで、ますます多忙な日々を送っています。

以上研究室の紹介を終わりますが、なにか質問、提案等ある方は、ぜひぜひ51号館10階まで、いつでもいらしてくださいませ。

中田研究室

中田研究室では、生理活性化合物の全合成研究を中心に、合成の方法論の開発等を展開しています。

全合成研究：

現在、主として Taxol、Eleutherobin、Ustiloxin、Phomopsin A 等のチューブリンに作用し、抗腫瘍活性を示す天然有機化合物の合成研究を行っています。これらの化合物の全合成においては、最初の全合成を目指すものもあり、また、全く新しい合成ルートにより全合成を行っているものもあります。

合成の方法論の研究：

生理活性化合物の全合成においては、その不斉中心をいかに効率よく構築するかが問題となります。不斉合成法は、光学活性中間体の短行程合成を可能にする優れた方法であり、中でも金属触媒を用いる方法は効率の点から理想的で

あります。現在、生理活性化合物の合成を念頭に置き、近いうち一段落(?)つきそうな THF、THP 誘導体の合成の他、金属触媒を用いた分子内不斉シクロプロパン化反応等の研究を行っています。

メンバー紹介 (99/10/23現在) :

中田先生を頭に、

Taxol 班 : 元エース、現在 FA 希望中、最後の切り札 K 島 (M 2)

鬼のように実験を繰り返す実験マシーン、中田研一の美女 N 目 (M 2)

名うてのクレマー、何でも欲しがる I 本 (B 4)

Eleutherobin 班 : 今ならあなたも No. 2、現在班員募集中、策士 S 亮 (M 1)

Ustiloxin 班 : おなかか気になる 20 代、化学科の修造、英 O (M 1)

Phomopsin A 班 : 器用貧乏、ハッカーを夢見るスポーツマン、夜行性 M 松 (B 4)

WS 9885 B 班 : カフェイン中毒三歩過ぎ、存在は既に Dr. 級 S 木 (B 4)

Phomopsidin 班 : S 大支部所長就任予定、研究室の変(革)人 Niga (B 5)

不斉シクロプロパン化班 : 数々の伝説を作り上げた男、特攻隊長 T 内 (M 1)

さわやかでクールなナイスガイ、三年寝太郎 O 田 (B 4)

THF、THP 誘導体班 : 一日中カラムをやる、唯一の体育会系(?)、居眠り代魔王 T 野 (B 4)

の以上 12 名で日夜活動しております。

新田研究室

新田研究所では従来どおり、主に芳香族化合物を対象として研究を行っています。新しい芳香族化合物、複素芳香族化合物の新規合成法の開発、静的、動的な構造と電子的及び化学的性質の解明と新しい機能の発現などに着目し研究を展開しています。

研究室の日常生活は、有機系の合同ゼミや各自の興味を中心とした文献紹介に関するゼミを行いながら、残りの時間は各自の研究実験をひ

たすら続けています。

さて、メンバー紹介に入ります。まずは、とっても大きな新田先生。皆さんもご存知のように、優しくフレンドリーな方です。そして今年はまだひとり、いつも笑顔で話しかけてくださる池田先生がいっぱいます。学生のほうは、現在助手 1 名、博士課程 3 名、修士課程 1 名、学部学生 2 名で構成されています。大工仕事からゴキブリ退治までなんでも出来る助手の高安さんは、お話をしているととっても面白い人です。嵐を呼ぶ男と噂される D 3 の山本さんは、ちょっとシャイなヘビースモーカー。ルービックキューブのスペシャリスト D 2 の宮原さんは、先日、腰の手術を受け無事成功しました。ゲームマニアの D 1 納谷さんは、コンピューターにも詳しい人です。サッカーとスキーの得意な M 2 の田嶋さんは、よく洋楽を聴いています。自称いんちきライターの B 4 三ツ本君は、時々学校の駐車場で大好きなバイクをせっせと磨いています。もう一人の B 4 羽野は、立派な女雀士になるべく、日夜努力を重ねています。こんな個性の強い人たちの集まりだからこそ、毎日楽しく研究に励むことができる気がします。これからは、和気藹々とした研究室にしていきたいです。

古川研究室

初めに

我々古川研究室は、誕生してまだ二年しか経っておらず、非常に若い研究室です。そのため、学生は修士一年が三名、四年生が六名しかおらず、同世代ということもあって、とても和気あいあいとした仲のよい研究室です。基本的には 65 号館の一室に全員いるため、会話も弾み、楽しく研究を行っています。そんな我々の研究について、以下に説明していきたいと思ひます。

研究の方針

各種分光法を用いて、原子・分子レベルで物質(現在は共役系有機化合物を主な対象としている)の電子・分子構造並びに物理化学的諸現象を研究する。構造と光学的・電氣的・磁氣的

性質との関係を明らかにして、新規な性質を示す物質の創製をめざす。また、構造・光物性研究のための新しい測定法の開発を行う。

専門分野

物理化学（分光化学）、物質化学

今年の研究テーマ

- ポリパラフェニレンビニレン置換体を用いた有機エレクトロルミネッセンス素子に関する分光学的研究
- ポリチオフェンの一価、二価酸化物の電子構造に関する研究
- 立体規則性ポリ（3-オクチルチオフォンの）の合成と構造に関する研究
- 共役高分子／フラーレン複合体の構造と光誘起電荷分離機構に関する研究
- 全反射 FT ラマン分光法による高分子薄膜の構造に関する研究
- 誘電性高分子の光誘起過程に関する研究
- 鎖状共役分子チエニレンビニレンオリゴマーの二価カチオンの構造に関する研究
- キレート金属錯体を用いた電界発光素子の構造と発光機構に関する研究
- 有機色素を用いた電界発光素子の構造と発光機構に関する研究

研究内容

実験が主。分光測定（吸収、発光、ラマン散乱）、高分子試料の合成・調整、デバイスの製作、分光測定の立ち上げなど。

活動内容

週一回、輪講（P. W. Atkins and R. S. Friedman, "Molecular Quantum Mechanics", Third Edition, Oxford, 1997の輪講と演習問題）・セミナー

松本研究室

松本和子先生の研究室では、3グループに分かれて研究を行っています。

プラチナグループには、P.D.のDr.L, D2のSさん, M1のYさん, B4のIくんとMさんの5人が属しており、Pt錯体を用いたアルキル／オレフィン触媒反応や、新規化合物の合成、DNAとの相互作用などを、NMRやX線構造解析、HPLCを用いたUV検出などの各種の分光化学的手法を用いて研究を行い、松本研発足以来、「世界」に認められる優れた成果を上げてきました。その過程で買い集められた、多数の試薬が研究室の棚を埋め尽くす様は、圧巻です。「ちゃんと整理しなきゃ……。」

ユウロビウムグループでは、生体分子の超高感度検出のための希土類蛍光錯体の合成とそれを用いたイムノアッセイ、DNAハイブリダイゼーションアッセイそしてHPLCを行っている。このような分析に希土類蛍光錯体を用いるのは錯体の蛍光寿命が長く、励起極大と発光極大が大きく違うためバックグラウンドを除去した時間分解蛍光測定ができるからである。現在では主にテルビウムを用いた錯体を使って様々な物質の高感度検出を行っている。

Ruグループでは、現在学生2人、ポスドク2人の計4人で日々研究を行っています。不安定な錯体を扱っているため、真空と不活性ガスのラインでシュレンクやシリンジを駆使したり、歯がゆい思いをしながらグローブボックス内で作業したりして、実験を行っています。

主な研究は、構造が似ているためにカニと呼ばれている、ジスルフィド架橋ルテニウム二核錯体を用いて、いろいろな基質と反応させてC-S結合を生成することです。他には、Sの代わりにSeが入った錯体を扱った研究などもしています。究極の日標は、触媒を作ることです。

以上、松本先生と愉快的な仲間たちでした。

稲化会会計報告

97年度	
前年度繰越	1,466,246
【収入の部】	
会費(97)	273,000
	93
合 計	1,739,339

【支出の部】	
理工学部年会費	3,000
案内(理工90周年・稲化会総会)	80,082
総 会 費	77,239
印刷費(会報14号)	147,370
通信費(会報14号)	148,336
原 稿 料	5,500
振込用紙作成(1,500部)	1,600
郵便局手数料	2,160
次年度繰越金	1,274,052
合 計	1,739,339

98年度	
前年度繰越	1,274,052
【収入の部】	
会 費(98)	225,000
利 息	166
合 計	1,499,218

【支出の部】	
理工学部年会費	3,000
祝金(応化80周年祝賀会)	30,000
振込入金手数料(郵便局)	3,200
次年度繰越金	1,463,018
合 計	1,499,218

お 願 い

○稲化会へのご意見や卒業生の方々のなされている研究の内容等、自由な投稿をお願いします。

〒169-8555 新宿区大久保3-4-1

早稲田大学理工学部連絡事務所係気付

○稲化会費を納入してください。正会員1,500円、学生会員 750円。なお終身会員費は30,000円です。最近滞納する方が増えておりますので、お支払いをお願い致します。

○住所が変更になられた方、また卒業生で最近住所が変更になられた方を知っていらっしゃる方、お手数ですが稲化会へ連絡をお願い致します。

○同封にてお送りしました名簿のチェックには万全を期したつもりですが、変更・間違い等が万一ございましたら、ご連絡下さい。宛先は、

〒169-8555 新宿区大久保3-4-1

早大理工 化学科 連絡事務室内稲化会事務局

稲化会役員

会長	長瀬 裕		
副会長	松本和子		
監事	高橋博彰		
評議員	井口 馨	伊藤絃一	高橋博彰
	高宮信夫	多田 愈	中井浩巳
	中田雅久	新田 信	松本和子
	石原浩二	長瀬 裕	矢野圭一
	中山 匡	小又昭彦	井上国兄
	宮田信郎	百瀬 浩	小林憲司
	宮野浩行	伊藤信一	塚田光男
	境之住樹	小西隆太郎	朝倉徹也
	泉千英子	神崎昌之	五十嵐庸
	國松美由紀	上杉有紀	森川 毅
	野口由木		
編集理事	伊藤絃一		
会計理事	石原浩二		
庶務理事	松本和子		
学生理事			
M 2	佐藤典明	夏目里美	川原井康夫
M 1	佐藤俊介	羽野友紀子	馬場 健
	佐伯奈美		
B 4	市川尚志	伊藤邦孝	塩野大寿
	中田安紀	山根理恵	
B 3	江副正史	金 元一	佐々木沙織
	福田 薫	森脇 誠	依田杏介
B 1	大鳴陽介	笠原崇廣	小林正人
	桜田奈央子	中野 永	山谷舞子

〈編集後記〉

稲化会報第15号をお届けします。前号が平成9年8月発行ですから大変遅れてしまいました。担当者（主として伊藤）の怠慢が原因ですが、同封の名簿の作成に時間がかかったことも事実です。より完全な名簿を作ることは、稲化会活気の原点です。ご自身又は周辺の方々の住所に誤りがありましたら、是非事務局（上記）または伊藤（E-mail: itohk @ mn.waseda.ac.jp）までご一報下さい。

記事にもありますように、平成10年2月10日に井口馨先生が逝去されました。お孫さんのお世話で停年後の悠々自適の生活を楽しんでおられるというほほえましいニュースに接した矢先の訃報に大変驚きました。先生のご冥福をお祈りいたします。

化学科では、分子科学研究所に移られた藤井正明先生の後任として平成9年9月から古川行夫教授をお迎えしました。すでに学生の先頭に立って活発に研究を展開されています。早稲田でも、世界をリードする研究成果が、近いうちに生まれることでしょう。

政治、経済、教育などの面で多くの問題をかかえて日本社会は2000年期を迎えようとしています。このような困難な状況において、稲化会メンバーとして、皆様がくじけることなく著実な歩みを続けられますように心から声援を送ります。（平成11年11月、文責伊藤絃一）